

「ノーモアヒロシマを世界に訴えたい」

親鸞聖人被爆像 寄贈から60年

ニューヨーク
仏教会



「被爆の証人である親鸞聖人像を国連のあるニューヨークへ。ノーモアヒロシマを世界に訴えたい」と、広島で被爆した親鸞聖人像（写真右）が1955年に米国ニューヨーク仏教会に寄贈され、今年で60年を迎えた。寄贈日の9月11日に銅像前で記念法要が営まれた。

法要営み、非戦・平和の決意新たに

被爆した聖人像は、広島市内を見下ろす広島市西区三滝町の通称「聖ヶ丘」にあった。昭和12年、大阪で鋳造業を営む篤信な門徒・広瀬精一さんが土地を求めて建立。像を中心

に休憩所や礼拝所が設けられ、講師を招いて法話会が開かれていた。戦時中の金属供出も住民の強い反対によって免れたが、昭和20年8月6日、広島に投下された原爆によって、爆心地から2・5キロに建っていた聖人像は、

熱線を真正面から浴びた。昭和30年、広瀬さんの発意により、米国ニューヨーク仏教会へ贈られた。当時、仏教会

主幹を務めていた関法善さんに宛てた手紙には「被爆の証人である親鸞聖人像を国連のあるニューヨークに安置することこそ、聖人の

平和への願いを全世界に訴えることができると綴られている。法要には仏教会のメンバーをはじめ、日系

米開教区の梅津広道開教総長や池田アール駐在開教使らが中心となって法要を営んだ。

梅津開教総長は「一方的な『平和』を主張し過ぎることが対立を生み、時として戦争へとつながることもある。アメリカ社会の中で、非戦・平和を訴え、兵戈無用の仏教の教えをいかに広めていくのか、難しいことだが極めて重要である」と話した。式典後、仏教会で記念式典を行い、ミチエ・タケウチさんが自らの被爆体験談を語った。

記念法要の準備を進めてきた関さんの娘・関法真奈さんは「原爆投下を間近で見た親鸞像は、2001年9月11日、同時多発テロ事件で世界貿易センターが倒壊するのをこの場所で目の当たりにされた。父と広瀬さんの平和への思いを次代へ伝えるべく、真の世界平和と核兵器廃絶を聖人像と共に訴えたい」と話す。



「被爆の証人である親鸞聖人像を国連のあるニューヨークへ。ノーモアヒロシマを世界に訴えたい」と綴られている。